**ドイツにおける難民：現場の状況（報告要旨）**

**マルテ・ヤスパゼン**

　昨年2015年には多くの難民がドイツにやってきました。ドイツもそれらの難民に対して、他のヨーロッパ諸国と比べても積極的に対応しました。このことの背景には、ドイツの憲法で規定された「アジール権」があります。アジール権とは政治的に迫害されている者が、ドイツで保護される権利のことで、ドイツはナチ時代の反省から、こうした権利を憲法に規定しています。

　2015年には、ドイツに1,100,00人の難民がやってきました。大変な数で、私自身も夏に、難民が歩いているために高速道路が閉鎖になっているのに行き当たったことがあります。難民のうち庇護を申請したものが440,000人（うち、シリア人160,000人）で、申請を認められたものは140,000人です。認められない場合、出身国に送還されることになります。

　ドイツ人はこうした大量の難民の流入にどういう反応を示しているでしょう。ドイツを、移民とともに生きる「移民国」にすることには賛否両論あります。経済的には、少子化が進むドイツでは、現在の生活水準維持するためには、労働力として毎年500,000人の移民が必要という議論もあります。世論調査をすると、「移民OK」、「移民反対」、「決まっていない」がおよそ3割ずつになります。

　2015年の夏には、たとえばある週末にはミュンヘンに2万人の難民が到着しました。こうした事態に対して、ドイツ人のリアクションには二つの形がありました。第一は「Welcome文化」とでもいうもので、難民を歓迎し、援助しようとする人々の動きです。第二は、難民の受け入れに反対する人々で、受け入れを表明したメルケル首相を「非国民」と呼んだり、反対デモや受入れ施設の放火などというところまでエスカレートした極右勢力もあります。

　こうした両極に分化するドイツ人の反応を理解するために、難民受け入れの現場での問題を見ておきましょう。

　難民がドイツに到着すると、指紋の採取などをともなう「登録」がおこなわれ、「難民証明書」が発行されます。そして到着後、とりあえず最初に暮らしてもらう施設に行ってもらいます。難民の受け入れ数は、連邦州ごとに振り分けます。たとえば、2015年には、ブレーメン（都市州）に12,000人、ハンブルク（都市州）に40,000人、ノルトライン＝ヴェストファーレン州には140,000人割り振られました。

　受け入れ施設では、宿泊・食料・衣料が提供され、さらに、他の現物支給、あるいは現金の支給があります。急にたくさんの人を受け入れなければならないので、いろいろとむずかしいことも起こります。医療、言語教育、子どもの学校、施設内の治安、警備などです。また、難民として入国してから3カ月は仕事をしてはならないことになっており、収入がなかったり、時間をもてあましたりといったことが問題になったりします。

　現場のスタッフが足りないことも問題です。多くのボランティアが必要とされています。

　さらに、「カルチャーギャップ」の問題もあります。難民の出身地の文化・慣習がヨーロッパ的なものに適合していないことが、問題を引き起こします。たとえば、女性の役割です。宿泊施設の中にごみが散らかっていても、男たちはそうじしようとはしません。そんなことは「女のやること」だからです。

　未成年の単身者についても心配なことがあります。家族や保護者のいないこうした人たちのうち、150人ほどが行方不明になっています。

　そして今後長期的な問題になってくるのが、臨時の宿泊施設ではなく、長期的な宿泊施設の問題です。たとえば、ハンブルク市では、2015年に40,000人、2016年に39,000人難民を受け入れ、そのための費用がおよそ6億ユーロ（750億円）に上ります。ハンブルク市では5,600の新しい住居を建築するプランを持っていますが、ここでたいへん重要な問題となるのが難民の「統合」です。大規模な宿泊施設は難民たちを一地区に集中させ、いわゆる「ホットスポット」とか「ゲットー」というような場所を生みだし、難民と先住の市民とが混合・交流して暮らしてゆく社会の実現―それが「統合」ということですが―にとって逆効果になります。そこで「うまく統合されたハンブルク市（Hamburg für gute Integration）」というスローガンを掲げて、大規模な宿泊施設に反対する市民運動が生まれて、住民投票を求めています。ハンブルクのプロテスタント教会も、「社会的孤立ではなく統合」という考えを表明しています。

　こうした考え方は、先ほどみた「難民反対」を唱える極右勢力などとは異なり、ハンブルクの市民団体もそうした勢力とは共に行動しない方針をはっきりと示していますが、「大規模施設反対」が「難民反対」と誤解されかねないという危険はあります。

　多くの難民を受け入れるのは、容易なことではありません。しかし、たいへんだからと言って安易な方法を取ることは、難民たちの住むゲットーを生みだしてしまうかもしれません。市民と難民が共に生きてゆく「社会的統合」が重要だと思います。